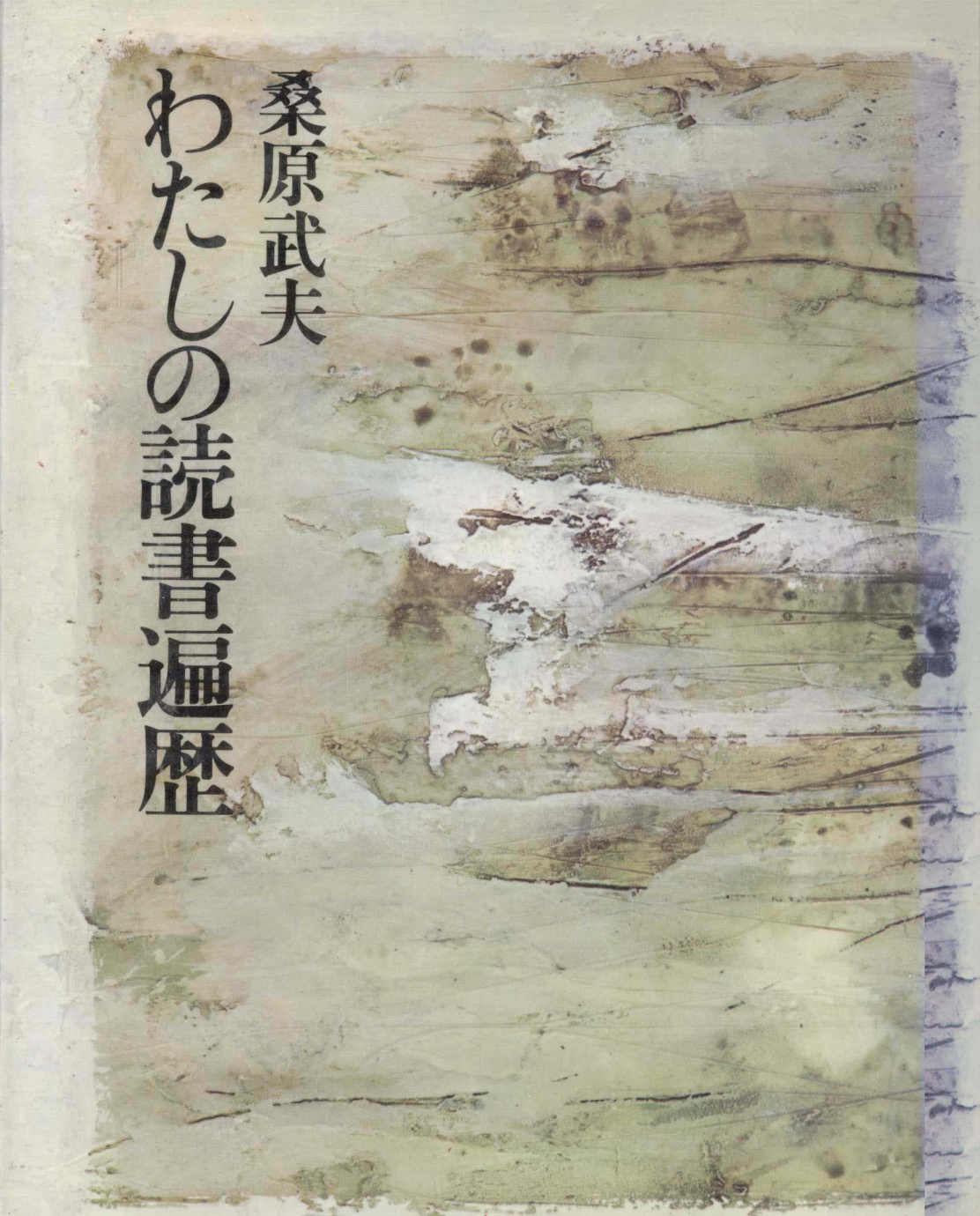


桑原武夫

わたしの読書遍歴



わたしの読書遍歴

桑原武大

わたしの読書遍歴

©一九七八
検印廃止

昭和五十三年八月十五日 印刷
昭和五十三年八月二十五日 発行

著 者 桑 原 武 夫

発行者 富 岡 勇 吉

発行所 株式会社 潮 出 版 社

東京都千代田区飯田橋三十一―一三
電話 東京(03) 280 〇七四一(販売部)
280 〇七八一(編集部)
振替 東京五一六 一〇〇九〇
郵便番号一〇二

(乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替
えいたします)

印刷 第一印刷株式会社

製本 株式会社 鈴木製本所

はしがき

私の読書に関するエッセーを集めて、この本をつくった。

私は本を読むことを、いわば商売としている人間だから、私の書くものはすべて読書とかわりがあるはずだが、ここでは本そのものと本を読むという行為に関する文章のみに限った。

近ごろ青少年の活字ばなれということが言われ、これを嘆く声が聞こえる。嘆くことはおよそ何の役にもたつまい。出版業者が自分たちの出した本の売行きが思わしくないと嘆くのは、無理もないが、日本の図書発行総量は減少してはいないのである。

昔の物差しで今を計って、今が昔でないなどという嘆きは意味がない。今の大学生が明治時代の大学生と違うのは当たり前ではなからうか。大学生活の享受を目的とする今の多くの大学に、森鷗外のような読書家がうようよしていたら、むしろ気味が悪からう。

読書の生活の中で占める場所は確かに変わった。映像文化、スポーツ、観光、ギャングブルなどの隆盛にもなつて、産業としての活字本の運命は変わらざるをえない。十九世紀から二十世紀初めへかけてのような活字文化の覇権はもはや望むべくもないが、それは産業の問

題であって、人生における読書なるものの意味は簡単に変わるものではない。ただ、出版産業の流通機構が日本では特に悪く、東京以外でほしい本を入手することはきわめて困難になってきて、これが読書の真の意味の実現をさまたげていることは否定できない事実である。活字ばなれを嘆いたりしているひまに、流通機構の改革を考えるべきであろう。

まともな青少年は今もちゃんと本を読んでいる。あるいは読もうと心がまえしている。ただ、彼らは人生において読書のもつ深い意味と、その身にしみるような楽しさを知っているが、同時に、人生をとらえ、みたすものは読書だけではないという直覚をもっている。私もまた、そのように思いつつ読書を重ねて生きてきた。これらの文章が少しでも共感されるところがあれば嬉しい。

一九七八年初夏

桑原武夫

わたしの読書遍歴
目次

はしがき Ⅰ

Ⅰ

書物について	11
読書	18
書評のない国	36
読みそこない	38
書物ぎらいの読書人	41
読書漫談	44
私の読書遍歴	52
緑陰読書	56
幼いころの絵本	60

Ⅱ

生きるよろこび	67
日本で読む西洋文学	76

西洋文学の魅力	93
私のノンフィクション	107

III

トルストイ『復活』	113
アベ・プレヴォ『マノン・レスコオ』	124
プーシキン『大尉の娘』	137
アンドレ・ジッド『狭き門』	148
ヘミングウェイ『武器よさらば』	158
中江兆民『三酔人経綸問答』	168
竹越与三郎『二千五百年史』	174
宮崎滔天『三十三年之夢』	180
南方熊楠『十二支考』	185
内藤虎次郎『日本文化史研究』	190

索引（人名・書名）

装幀 熊谷博人

わたしの読書遍歴

I

書物について

書物について書けという。しかし私のようなものに、書物について語る資格があるだろうか。

書物について

どんな思想にも動かされやすい中学時代のことではあるが、宮崎安右衛門という人の『乞食桃水』という本を読んで、その一節にひどく感心したことがある。書物というものは結局、その内容さえつかめばそれでよいのであって、外形としての書物のごときは甚だつまらぬものに過ぎない。ハイネはよく野原で本を読んだが、読みおえたページから引きちぎってこれを小川に流したという、これが本当の態度でなければならぬ、というふうなことが書いてあった。この詩人の綺麗な顔はどこかで見覚えがあり、本のページを野の小川に笹舟のように流すというイメージが特に気に入って忘れられず、自分も何か実行したくてならなかった。間もなく試験があり、答案をいち早く出して教室から駆け出すと、現代文ばかり集めた国語の教科書をずたずたに引きちぎり、この中に書いてあることぐらいみんな知っているから無

用だと称して、それを校庭にまきちらした。私の煽動にのって暴挙に参加した愚か者が他にもあり、紙片は折りからの比叡おろしに吹雪のように散った……。

もちろん、今の私はこうした愚行を全面的に否定する。しかし今もなお、「汝がうちに汝の心あり、また汝がまわりにかくも多くの星と花と鳥あるとき何の故の書物ぞや」というアシジの聖者の言葉が時として美しく思われることがあり、「ラテン語では馬をエクウスというとかかわってから、わしの馬についての知識がどれだけふえたというのか」と自分のラテン語の弟子にさとす『パルムの僧院』のブラネス師の言葉にはいつも微笑する。してみれば私のうちには、どこかにあの生意気な中学生がなお潜んでいるともいえようが、実はこれらの言葉が私を動かすのは、私が本好きだからであると思う。いわば大食漢に対する清涼消化剤のごとき働きをなしているにすぎないのである。そして中学当時の私は甚しい濫読家であった。今もその癖はぬけない。

書誌的精神エスライシツバはあまり尊敬しないといっても、世界は先人の残した優れた書物によって己れの精神をみがくことによってしか、正しく見えてこないことはつきり感じられ、従って外形としての書物の重要性和その尊重の必要を確信する点においては、私も人後に落ちぬつもりである。図書館の本を粗末に扱う学生は私の最も厳しく叱りつけるところのものである。またフランスなどで、十七・八世紀の革表装の古本のページを糊ではりつけ、中をえぐってタバコ入れの小箱に仕立てたものをよく売っているが、私はあれを見るとほとんど肉体的嫌悪を覚える。しかし、典籍趣味というものに至っては未だによくわからないのである。

私にも多少の蔵書はあり、中に稀観書にちかいものも、二、三なくはない。バルザックの個人雑誌「パリ評論」の合本、モルネの『フランスにおける自然観』、ルネ・カナの『孤独感情について』等々。スタンダールはシャンピニオン版を揃えていて、うち数冊は二十五部限定の日本局紙本である。しかし、いずれも珍書善本というので求めたのではなく、自分の仕事に必要な上に、案外安く見つけたからにすぎない。

良質紙に鮮明に印刷され美しく装幀されたのが快いことはいうまでもない。しかし本は工芸品ではないのだから、それを余り珍重すまいという気持が私には常にある。愛書趣味がわからぬというより、わかるまいとしているのかもしれない。豪華本——この言葉はかつて某書房がはやらせた石鹼の包み紙を思わせる浅薄な装幀本と共に私たちの語彙に入ったので、余り好ましくないのだが——豪華本のことを語る人は多いが、軽薄な文字が美々しくかつ堅牢な本になっているのを見た時の一種変な感じを述べた人の少ないのはどういうわけであろう。私はそうじてフェティシズム（拝物）を好まないが、書物に対しては特にそうである。アランはフェティシストと自称しているが、それはテキストについてであって、傑作の抄本、削除、誤植に堪えられぬものである。そういう意味なら私も全くフェティシストである。しかし傑作はどんなザラ紙に乗っても、やはり美しい。ラシーヌは五フラン本でもあくまで清純であり、パスカルは教科書版でも思想の深淵をのぞかせる。天のなせる美人は粗服にしてかえって美しく見え、そこに一種の風情すらあるといえる。傑作を驗する一法というべきか。

しかし無風流な私にも一種の尚古癖はあって、たとえば内藤湖南先生が東山文庫をご整理申上げたとき、宋版本を見つけて思わず感涙を催されたという告白のごときは、全く同感できるのである。この同感は、色々のものを含んでいるが、私がかつて欧州に遊んだとき、イタリヤのベストームのギリシア神殿に感動し、またフランスのお寺めぐりでも十五・六世紀のものより、十二・三世紀のものを偏愛した、その気持と同じところから出ている。それらの古物には美的にすぐれているということのほか、人間の過去ヒストリヤのいとなみが治乱の幾百年をへて今になお伝わり存し、人間文化の悠久をまのあたりに示すところがあるから心を動かすのである。まして本は亡びやすいものである。内藤先生はご自身も国宝に指定された宋版を秘蔵しておられたが、蒐書もここまではなればありがたい気がする。そしてその共感には恐らく私の好みも加わっているであろう。私はなぜか書物らしい書物といえは帙に入った漢籍を思う。紙虫に弱く、風が吹けば破れそうな薄紙、それは書物の運命を象徴しているように思われて味わいが深い。表紙はいつも簡素で、色彩といえは綴じた角に僅かに色布があつて清楚な趣を添えるにすぎない。厚い革をよろつた西洋の本は概して少しいかめしすぎる。バチカンの法王庁には人間の皮膚で装幀した本があるが、これは罪人などの生身にあらかじめ入墨しておくのだという。全く言語道断で、これだけでも私は近時流行の中世崇拜に雷同し得ないのだが、西洋では一般に表紙に凝りすぎて悪趣味に堕したものが少なくないのは遺憾である。それにパピルスなどを除けば、古いといつても十五世紀だから、漢籍の蒐集家のあまり珍重せぬという明版にあたるわけである。ましてや十九世紀の珍本などというものは